

原著論文

「ケアと情念」

加藤 直克*

序

ケアにおける感情の問題は、最近「感情労働」や「感情管理」といったキーワードのもとに、多くの研究や論考が現れている。そこでは主に情念や感情がどのような形でケアする行為に影響を与えているか、すなわちケアを促進したり、あるいは阻害したりしているかという問題意識が中心となっているように見える。しかし本論文において筆者の関心は、あくまで「ケア」という概念の探求そのものにある。すなわち、「ケアにおける情念や感情」ということではなく「ケアをしてケアたらしめるものとしての情念・感情」とは何か、ということである。ケアについては、すでにさまざまな視点からの研究がなされており、それに従ってケアという形で表現される行為、役割や影響もさまざまに論じられている。しかし、ケアがどのような様態や効果を持つとも、それがケアであることの核心は何かということは、常に考えてよいテーマである。というのも、それを通してある行為や態度がなぜケアと呼ばれるのか、そしてケアと呼ばれることにおいてなにが目指されているのかを明らかにすることができるからである。

ケアという言葉は今日、さまざまな領域や場面で感覚的、直感的に便利に使用されている。とくにわれわれの暮らしを支えるもの、指針となるもの、求められているものを表現するとき、多くの人がケアという言葉が好きで使用するように見える。ケアにはことさら現代の生活に適合する意味が含まれているのではないかと考えられる。

そこでケアという概念を考えるための視点をいくつか挙げてみることにする。そしてその中で、感情や情念がどのような形で現れているか、あるいはケアすることにどのような影響を持っているかを考えてみたい。

1. ケア概念を考えるいくつかの視点

第一の視点として、ケアが英語に由来する言葉であるかぎりにおいて、英単語としての care に注目したい。ここでは詳しく論じないが、care はさまざまな意味と背景を持っている⁽¹⁾。それをまとめると、「心配」「気づかい」という感情的側面と「世話」「援助」という行為の側面を認めることができる。これは英語としては、前者が care about、後者が care for もしくは take care of という熟語表現で示される。care ないしは caring という言葉が用いられるときに、この二つの意味がどのように含意され、あるいは

配分されているかということは、大切な視点である⁽²⁾。大きくとらえると、前者の感情的側面は、ケアの動機、理由を示し、後者の行為的側面は、ケアの事実と結果を示すと言いうことができる。そしてこの二つの側面が統合されるところでケアはケアとして成立するということだが、とりあえずは考えられる。問題は日本語でケアと言いうとき、英語の care に含まれる感情的側面がどこまで自覚されているのだろうかということである。

第二の視点はケアという言葉がなぜ20世紀末に、世界的にかくもひんぱんに使われるように

* 自治医科大学ドイツ語・哲学研究室

なったのかという問題である。すなわちケア概念の歴史的社会的なコンテクストは何かということである。20世紀末を特徴づけるものとして科学技術の進展、グローバリズムに支えられた高度情報化社会、家族形態の変化や共同体の変質ないし崩壊、脱宗教・脱イデオロギーのあとのナショナリズムや原理主義の台頭、社会のボーダーレス化といった現象を挙げることができる。しかしその背後で進行しているのはニヒリズム、すなわちあらゆる価値の相対化と人間活動の無目的化、無根拠化であると考えるのが、筆者の基本的な視点である。そこでケア概念の浸透とニヒリズムの蔓延はたして関係があるのかということが問われうると考える。

第三の視点はケアが人間存在の基本構造をどこまで明らかにするものであるかという視点である。これはさしあたり筆者の問題意識においては、ハイデッガーが『存在と時間』において、現存在(人間存在)のあり方をゾルゲ Sorge(英訳では Care)と表現していることに由来する。しかしハイデッガーだけでなく、例えばフーコーにおける「自己への配慮」、レヴィナスにおける「他者=顔」の呼びかけに対する応答、ヨナスにおける「責任」といった現代哲学の諸問題はケアの意味内容と深く関わっている。そこで問題となるのは、これらの諸概念によってはじめてケアの本質が明らかにされるのか、それともケアの日常的用法と意味がこれらの概念を逆に吟味し、あるいは深化させることがありうるのかということである。前者の場合、ケアはさまざまな立場によってさまざまに理解される多義的な概念にとどまるということになるかもしれない。後者の場合、ケアという言葉が用いられる現場と当事者(広い意味での臨床)の恣意性や慣用によって、やはりケア概念は多義的なものにとどまることが懸念される。それゆえこの二つの道筋は二者択一と言うよりは、同時並行的に試行されなければならないと考えられる。すなわちケアは、人間存在をとらえようとするさまざまな概念と立場を参照しつつ、しかし同時にそれが用いられる現場の問題を整理し、人やものへの対応の仕方を検討する実践的な場面で、主導的な役割を果たす可能性を問うということである。

第四の視点として、とくに医学・医療の中で、医療者が患者にどのように対応するかという観点から、ケアがキュア(cure=治療)と対照的に論じられるということがあげられる。キュアは病気を生物科学的な因果関係に基づく診断によって同定されるべき疾患(disease)としてとらえ、投薬や手術などを行う。しかしケアは、病気をまずは苦痛、違和感、不安など患者の主観的な訴え(illness)としてとらえる。そしてそれを軽減し解消したりする手段としてキュアを用いる。この両者は当然の事ながら相補的なものであり、大抵は分裂や矛盾を表すことはないのであるが、とくに患者の生活の質(QOL)が問題となるときは、治療を優先するか、ケアを優先するかという問題に発展する場合がある。しかしこれはある意味では、ケア概念を取って狭めて限定的に使用しているという感を免れない。治療も患者というひとりの人間の抱える問題に対処するかぎり、常に広い意味でケアでなければならぬはずだからである。そしてその広い意味でのケアを「援助」ととらえると、医療を超えて、福祉や介護などの社会保障のサービスまで視野は広がる。そのときケアを提供する人はプロフェッショナル(専門職)として規定される。そこで問題となるのは、専門職が提供する「援助」ないし「サービス」は「ケア」概念とどう交わるかである。「援助」や「サービス」は、提供者と被提供者という一方通行の関係を前提とし、その行為についての利益や正当性が評価の対象となる。「ケアの倫理」という問題意識もそのような人間関係を前提としている。しかしそれは友達や家族など身近な人が行うケアと同じなのか別なのかという視点から再度吟味される必要があると思われる。

最後に、やや不適切な表現かも知れないが、ケアという概念の賞味期限はどのくらいかという問題もあると思われる。ケアは確かにいわゆる対人援助を中心に、強力なキーワードとして歴史的な役割を果たしている。それはこれまで顧みられなかった活動や行為に光を当てて、新たな試み、あるいは新たな職域を創出してきたといえる。しかし、ケアが行為として、あるいは仕事として日常化されるに伴い、ケアという言葉によって覆い隠され、忘れ去られるものも

でてくる。ケアという言葉を使えば、一定の行為や姿勢が正当化されるという安易さへの傾向を指摘する人もいる。この問題は、「ケアを成立させる援助とは何か」という問題と相俟って、やはり人間存在の根本に関わる他者と責任、正義と愛情といった問題と関連させて考える必要があると思われる。さらに言えば、われわれ日本人にとってケアはあくまで外来語である。ケアの本質的な部分をもう一度日本語の語彙の中で吟味してみることは、ケアという言葉の中に埋め込まれた情念とケアによって触発される情念の両面を見極めるためにも必要な作業であると思われる。

ケアをめぐる以上のような視点を手がかりに、つぎに「情念」がどれほど「ケア」という行為にとって本質的であるかを考察してみたい。

2. ケアという言葉の使用の歴史的・社会的背景

1) ケアという言葉の氾濫とその背景

ケアは先に述べたように、適用範囲の広い言葉であり、美容から始まり、医学・看護・福祉・介護、そして教育の領域においてさまざまな意味を伴って使用されている。いわばそれぞれの領域で独自のケアの形、その実践と展開があり、さらにそれらは次々と出現する問題状況によって変化していく。しかもケアという言葉がこれほど多用されるようになったのは、この20年ほどであり、それも単に日本だけにとどまらない、いわば世界的な現象であるといえる。いうまでもなくそこには20世紀末から21世紀へかけての社会の変化という歴史的なコンテキストが織り込まれていると考えられる。すなわち日本を例に取れば、列島改造による高度経済成長がバブルの崩壊とともに終わりを告げ、それまでに家族、地域、教育機関、会社などにおいて起こっていた変質が明らかとなり、旧来の生き方や価値観が相対化されたこと。具体的には、自由主義と情報化によって個人主義が浸透し、それまでの日本人を特徴づけたエートス、暗黙の前提やいわゆる社会常識と呼ばれるものが忘れられ、通用しなくなっていったこと。さらには市場経済の浸透とともに、技術競争と価格競争な

どを通じての容赦ない淘汰やそれに伴うリストラが進行し、社会基盤の流動化、社会生活の不安定化が進行したことなどである。これらは核家族の進行、産業基盤の変化、個人主義、自由主義の浸透という人々の生活形態と生活意識の変化の現れとしてとらえられる。この変化は、資本主義社会の成熟に伴う先進国に共通した特徴といえる。このような社会では、人々は自分の能力を磨き、機会に挑戦していく姿勢が求められる。それを象徴するのが市民社会を構成する個人を特徴づける「自立 (independence)」, 「自助 (self-help)」, 「自律 (autonomy)」の精神である。そこでは、家族や地域、友人との人間関係ならびに習慣的、伝統的な思考や行動は、必ずしも無条件に尊重され優先されることからはなくなる。一人ひとりが自らの責任において、自己と社会の維持と発展に寄与する義務と権利とを負うとされる。しかしそこには、個人のアトム化と共同体の崩壊ないし変質、あるいは共同体の再構成、再構築が同時進行している。

今日、このような自立、自助、自律といった行動規範を支えるものとして二つ原理をあげることができる。一つは、理性と合理的思考をそなえた個人の尊重であり、もう一つは利益と欲望の実現を通じて満足・幸福を達成する権利を持つ個人の尊重である。これらは個人の尊厳としてとらえられている。しかしこの二つの原理が一人の個人の中でどのように両立するのかは決して自明でもなければ容易でもない。いきおい個人の利益と満足、ないしは自己実現ということが主になっていく。それは競争社会を勝利し生き抜いていく人間像、もしくは自分の個人的な満足と幸福のみを優先させる人間像に収斂していく。またこのように競争社会において自己実現を果たす人間像を強者とすれば、さまざまな理由で弱者の地位に甘んじざるを得ない人も当然生じてくる。小児、高齢者、障害者、患者などがそれである。このような社会に普遍的に見られる傾向は、他者に対する無関心、他者との絆の希薄化、その結果としての個人の孤立、孤独化、不安や不信感の増大である。

こうした状況の中で、様々な問題を抱えた人への対応をどのようにしらよいか、「尊厳ある個人」としての存在、ないしは権利をどう守るか

という課題は、社会保障、社会福祉の場面では焦眉の急を告げている。とりあえずは最低限の生活環境を成り立たせることから始まり、さまざまな領域で、試行錯誤の支援・援助が試みられている。このように、一方においては最もベーシックな生活と環境の再構築という課題と平行して、他方で能力や可能性に富んだ個人にとっては、より洗練された、あるいは快適で魅力的な生活の創造へむけてさまざまな努力や試みが行われている。たとえば、生活をより快適にするケア（より健康に、より美しく、生き甲斐をもって、ストレスを発散させながらなど）がそれである。注目すべきは、このように社会の内部に対立を起しかねないほど異なった二つの方向性、すなわち援助を求める人に対する対応と、さらに快適で魅力的な生活の構築との両方に対して共にケアという言葉が使用されているということである。その意味で、ケアは時代を反映する言葉となっている。

2) 個人レベルのケアと社会的レベルのケア — 親密圏と公共圏

問題を援助を必要とする人に対する対応に限定してみよう。このような取組には、個人的、日常的なレベルと、社会的・政策的なレベルがある。個人レベルは先ほどの言葉を使えば親密圏での対応であり、社会レベルでは公共圏での対応となる。これら両者の対応の性質はおのずから異なったものであるが、やはりどちらにもケアという言葉が使用される。家族や地域の機能の衰退に伴って、「ケアの社会化」ということが語られるが、医療・福祉・介護の充実はまさに社会政策としてのケアを基盤としている。

一般的に親密圏での対応が十分に行われているところでは、公共圏での対応は相対的に少なくなる。インドではまだ大家族制度が一般的であるため、自治体の仕事の中で社会保障に関わる部分は驚くほど少ない³⁾。親密圏での援助行為は、報酬が支払われないシャドウ・ワークないしはアンペイド・ワークとして、大抵は女性によって担われる日常生活の実質的内容として理解され、行われてきた。しかし親密圏は当然、閉鎖的で非言語的な要素が多いことから、その中で実際にどのようなことが行われてきたのか、人々がどのような人間関係を形成し、どの

ような抑圧や不当な行為が行われているかは見えにくい。社会の変動が激しい現代では、親密圏での対応（ケア）が希薄になるという一方で、親密圏特有の桎梏や抑圧の中で不当な扱いを受けてきた人が声を上げ、権利の回復や状況改善への援助が行われる可能性が出てくる。

しかし、先にも述べたように、ケアという言葉の背景をなす歴史的なコンテクストにおいては、まずは変化や流動化に伴う喪失感、不安感が根底にあり、その中で何とか日々の生活を成り立たせつつ、さらに自己実現や新しい人間関係・社会関係への展望や希望を育てていくという人間の営みが見てとれる。ケアという言葉は基本的にはそのような不安定な状況に適合する言葉であるのではないか。すなわちきわめて直感的な見方ではあるが、ケアは心配しつつ、気遣いつつ、困難な状況を支え、事態の改善と再構築とに向けて善意と希望をもって努力するというあり方全体を特徴づける言葉なのではないだろうか。

3) ケアにおける情念と感情

その際、心配しつつ、気遣いつつという情緒的な要素は、単に偶然的、一時的なものではなく、むしろはケアすることの根底にあって持続的にエネルギーを備給し、通奏低音のようにケアのプロセス全体を貫いているのではないだろうか。というのも、なぜ人はそもそも犠牲を払ってでも他人を援助しようとするのかという問題があるからである。他人への無償の援助は、端的にエネルギーと時間のロスであり、その限りで犠牲を強いる行為である。もしもあらゆる人が利己的な理由から無償の援助行為に参加しなかったら、社会はケアのコストで崩壊するであろう。しかし援助行動の理由を、喜びや満足感のみに求めることも難しい。たとえ喜びが得られることがあっても、それは付随的、偶然的なものにすぎないはずだからである。とすれば、われわれをケアへと駆り立てる何かがわれわれ自身のあり方のベーシックな部分に備わっているはずである。それを上に通奏低音という形で提示した。問題はペイド・ワークならびにアンペイド・ワークとしてのケアにおいて感情がどのように関与しているかである。

一般になにかをあるいは誰かを心配し、気遣

うことは、その時々、具体的な個別的状況に対する反応としての感情であるといえるが、それが持続的・潜勢的に一定のプロセスをたどるとき、その状況ないし対象への関与を支える根底的かつ持続的な感情をここでは情念という言葉で表したい。情念という言葉を使うのは、ギリシャ語の pathos を意識してのことである。中畑正志によればプラトン以前においては、そもそも「感情」に該当する言葉がないという。pathos はストア派において、「理性(ロゴス)あるいは自然に反した魂の動きであり、過剰な衝動」という感情の規定が確立したという。そしてそれより以前のアリストテレスにおいては、「働きや作用を受けること」を意味する paschein から派生して「作用を受けること」「作用の受容によって成立した状態」を意味するに過ぎないという⁽⁴⁾。このことから、pathos はその原義にさかのぼれば、ハイデッガーの言う現存在(人間存在)の被投性(Geworfenheit)に通じると考えられる。現存在のあり方を示すものは、情態性(Befindlichkeit)と了解(Verstehen)である。われわれは気がついたときには存在してしまっているという事実にも否応もなく直面させられている。それはわれわれにとって基本的に重荷であり、そこから由来する重苦しい気分がわれわれのあり方を根本的に規定しているとハイデッガーはいう。この不可避的な受動性を被投性(Geworfenheit)という⁽⁵⁾。このような形で自己の存在を引き受けなければならないということは、同時に自己のありかたを決めるのは他ならぬ自分自身であるということの意味する。それゆえわれわれは知らず知らずこのような重苦しい気分から逃れ、安心して気楽になりたいと考える。そして周囲を見回して、誰でもない誰か(ハイデッガーの用語では「世人(das Man)」)のように振る舞う。ハイデッガーは現存在についてのこのような分析を通じて、現存在のあり方を「何らかの世界のうちですでに存在していることにおいて己に先んじる」とことと定式化し、それを Sorge(気遣い)と呼ぶ。すでに述べたようにこのゾルゲの英訳が Care である。また現存在がさしあたり大抵「世人」として振る舞うのは、現存在のあり方に「共現存在(Mitdasein)」, すなわち「他者とともにいること」が

含まれているからである。この他者に対する配慮を「顧慮(Fürsorge)」という。「顧慮」は必ずしも親身になって心配したり世話したりする事だけを意味するわけではない。他者を敢えて無視したり、攻撃したりすることも「共現存在」から発する顧慮のあり方である。特定の人に対する愛着や憎悪といった感情は、常にすでに情態性において気分づけられてあることとしての共現存在を前提している。

これに対して、通常、個別的・具体的な感情は、その都度の状況と主体の性向・欲望との葛藤の生起(恐れ、驚がく、怒りなど)ないしは解決(喜び、悲哀、あきらめなど)としてとらえることができる⁽⁶⁾。しかし感情が感情として意識され表現されるには、それに先行する世界と自己に対する了解がなければならない。そうでなければ同じ事態に対して人が異なった反応や感情を示すことが理解できない。と言うことは、世界と自己に対する了解を形成しかつ維持する働きが先行しているということである。そしてこの働きをハイデッガーはゾルゲすなわちケアと考えたのである。これは別の視点からすれば、その人独自の、しかも必ずしも意識的とはいえない物語形成ととらえることができる。このような働きの根底にある気分が先に述べた情態性であり、それを個別的な感情とは区別される限りで「情念(pathos)」ととらえたのである⁽⁷⁾。

4) 感情労働としてのケア

感情社会学では、職務内容の一部として求められている適切な感情状態や感情表現を「感情労働」と呼ぶ⁽⁸⁾。援助活動が支払われる労働となったときそれは、専門職によるサービスといわれる。一般の商業活動では、顧客の関心と満足を引き出し、利益を上げるためにサービスの質の向上が要請される。そのとき単に人に対して適切に振る舞おうとする「表層演技(surface acting)」だけでなく、適切な感情に基づく「深層演技(deep acting)」が求められる⁽⁹⁾。このようにある目的のために自分の感情をコントロールすることを「感情管理」と呼ぶ。ホックシールドによれば、円滑かつ効率的に仕事を行うために「感情管理」を求められる感情労働者が陥るリスクに二種類ある。第一に、仕事に献身し、

そのために燃え尽きて感情麻痺を起こす場合。第二に自分自身を職務から切り離すことで「自分は不正直なペテン師だ」と自己嫌悪に陥る場合である。

ケアの社会化はケアする側に同様の問題をもたらす。専門職としてのケアは、一定の成果を生むことが求められている。もしも患者やクライアントの感情には関わらない部分でケアが完了するならば、さしあたりは演技としての感情の問題は起こらないように見える。その例としては意識のない患者を治療ないし看護する場合がある。しかしその場合も、一人の人が身体の世話を任せる状態で横たわっているという状況そのものが医師ないし看護師に何らかの感情を呼び起こすことは当然考えられる。その感情とどのように折り合いをつけるかという問題は、直接ケアのあり方に影響を与えると考えられる。

これに対して、患者自身が不安や心配で一杯になっているとき、あるいは看護者に対して粗暴な言葉を吐いたり、非協力的な場合などは、看護者も対応に苦慮することとなる。そこに専門職としての意識と本来の自分の感情との間で葛藤が生じる。しかしこのような事態にも自分の感情をうまく処理できるということが、看護者としての成熟に通じるという考え方が一般に行われる。それはある意味では当然の対応といえる。しかしケアということに関していえば、それがケアの可能性をふくらませていることか、狭めていることかを反省してみることは、決して無駄ではないと思われる。というのも看護者としての成熟が、「看護者としての自己実現」ではあっても、もしもその人自身を抑圧したり傷つけたりしている面があるとすれば、その人のあり方の全体をふまえての自己実現ではないかも知れないからである。

5) 「援助」ということ

われわれの振る舞いや思考が根本的に感情と情念によって規定され刻印されていることを自覚するのは、日常的な状況としては、何らかの変化、不安定性、不確実性が存在するときである。それは期待や幸福感を与えるものであるかもしれないが、多くは何らかの危機へとつながる状況を示している。そして人間関係の側面で

は、他者の存在である。他者とは一般的には了解できない人、見知らぬ人のことであるが、家族・友人・知人もさらには自分自身でさえも、ある時には了解できない存在となる。たとえば深刻な病名を告知された人は、その人の身体がそれまでの了解をこえたあり方をしていることに気づく。そこには当然、悲しみ、困惑、怒り、絶望と言った感情が渦巻く。そこからその人のあり方がどう展開するかは、その人自身及び周囲の人の関わり方によって変わってくる。そのような人への関わりには、通常は心配・気づかいというあり方が現れるが、しかしその関わりの内容をなすもの、すなわち具体的な行為としては「世話」もしくは「援助」である。しかしある行為が「援助」であるかどうか、あるいは「援助」となるかどうかは、それほど判然としているわけではない。「援助」は問題状況の克服やなんらかの目標の達成をめがけて行われることもあるが、単になんとなく不安であるなど明確な援助行動を取りにくい場合もある。そのときは、とにかく当事者のそばにいて、その人の言葉に耳傾けることが援助者としてもっとも適切な行動であるということもよく知られている。問題が具体的な細部に限定されるならば、専門的な知識・技術を持った人が確実な援助行動を取ることができると考えられる。しかし、問題がその人の生活そのものや考え方・人間関係・意識などといったその人の全体に関わる場合には、「援助とは何か」という根本に立ち返って考える必要が出てくる⁽¹⁰⁾。

2. メイヤロフにおけるケアと場所

「援助」と「ケア」の関係を考えるために、ここでメイヤロフの On Caring (1971) (邦訳名『ケアの本質』)を取りあげる⁽¹¹⁾。この小さな本は、およそケアを論じる人にとっては、ギリガン⁽¹²⁾やノディングス⁽¹³⁾とともに必読書の一つに数えられるのが通例である。しかし、その内容について立ち入った検討や言及は決して多くない。それはメイヤロフのケア概念が必ずしも対人関係に限定されない、包括的で抽象的な概念であることもその理由の一つであると考えられる。さらには1971年に出版されたこの本は、必ずしも現代の問題に適合していないという評

価がなされるからともいえる。しかしこの本の魅力は素朴で明るく力強い愛情に満ちていることであり、やはりケアの原点を指し示す好著であると思われる。以下、上に触れた問題についてメイヤロフからどのような示唆が得られるか見てみたい。

《一人の人格をケアするとはもっとも深い意味で、その人が成長すること (grow), 自己実現すること (actualize himself) を助けること (help) である。》(p.13)

これがメイヤロフによるケアの定義である。ケアの対象が人間に限定されているようであるが、動植物、さまざまな組織、芸術活動、哲学的な概念までケアの対象となりうる。これはケアされる方に重心があるのではなく、ケアする主体に重心が置かれていることを意味する。しかし、定義の内容はケアの対象である他者が成長し、自らを actualize することを助けるとなっている。ここで活動の主体はケアされる方に移行する。そして成長とは自らを actualize することとなっている。翻訳では、ここを「自己実現することを助ける」となっているが、ここではあえて actualize という表現に注目したい。自己実現は self-realization であり、それは目標の実現、資格や能力の獲得など外から検証できるものである。しかし self-actualization は、そのもの活動が活発かつ十全なものになるという意味を含む。あるいは活動の静止をも含むと言ってもよい。self-realization においては自己の行為とその成果、すなわちアイデンティティや自己実現に関心があるのに対し、self-actualization においては、自己はむしろ他者やものに関心と興味が開かれ、関わりを持つとする姿勢が特徴的である。もちろん self-realization を援助することもケアの要素であるのだが、重点は self-actualization の方にある⁽¹⁴⁾。それは次の引用とも関連する。

《ある人が成長するのを援助することは、少なくともある人が、何かあるもの、または彼以外の誰かをケアできるように援助することにほかならない。・・・そればかりでなく、その人が自分自身をケアすることになるように援助することであり、ケアしたいという自分自身の要求に目を閉じず、応答できるようになることを通

して、彼自身の生活に責任を持つように彼を援助することである。》(p.29)

誰かをケアすることによって、その人が本来の活動性を発揮できるようになると、その人はさらに誰か他の人もしくは対象をケアできるようになるとある。そしてケアされるべき対象には自分自身もまた入っている。これがケアされるものがケアするものとなっていくこと、これがケアの目標である。そしてそのとき、必ずしもケアする人の意見や生き方がケアされる人に受容されたり、受け継がれたりすることを意味しない。ケアされる人はケアする人からの独立性を保つのである。その意味ではケアが成立するとき、ケアする人はケアされる人によって無化されるということもできる。親は子供が成長することのみを願う。しかしそれは親の思惑や夢を実現することとは異なる。親は子供によって否定され、無化されることによって本来の意味での親となるといえる。ケアにおいては個性の異なるものが入れ子構造をなしていることができる。そして、ケアされた人がやがてみずからケアするものとなったとき、その人自身が他者を許容する入れ子となるのである。一つの入れ子は、他者を許容し、共に住むことを目指す一つの世界の有り様、すなわち actualization を示している。

《ケアするものにとって、ケアすることは「ケアすることを中心として他の諸価値と諸活動を位置づける働き」をもつ。「その位置づけが総合的な意味を持つとき、彼の生涯には基本的な安定性 (stability) が生まれる」。すなわち「世界の中であって、“自分の落ち着き場所にいる (being in place)” 》(p.15)

落ち着き場所をえることは self-actualization の基礎をなすと同時に、また究極的な目標ともなる。それはある世界の出現なのである。このような展望は、教育の場面では当てはまるが、患者の看護にはうまく該当しないと思われるかもしれない。しかし、看護は患者の苦痛を取り去り、身体の必要と安全を支えるにとどまらず、患者自身がともすれば内向きになる心を転じ、自分以外の何かに目を注ぎ、応答していくことを支えるということまでも、その視野に収めているはずである。その時患者は

「ケアする存在」となる。そしてそれによって患者自身が「場所をえる being in place」のである。それはさらに、患者が自分自身に対しても一個の他者として向かうことを可能にする。これがセルフケアである。このような他者への熱心さの様態が「専心」と「無私」である。

《専心 (Devotion) は友情に不可欠な要素であるように、ケアにとっても本質的なものである。・・・専心が失われれば、ケアすることは失われてしまうのである。》(p.24)

ケアの本質は「専心」,「没頭」にある。そこに「無私性 (selflessness)」を認めることができる。これは具体的には「聴くこと」「受け入れること」,しかも意図や操作など積極的な関与なしにそれらを行うことである。それは「応答」ということの基本的な姿といえよう。しかしそこで注意しなければならないのは「あなたのわたし, わたしのあなた」という閉じられた二者関係, 想像的關係, 視野狭窄に陥る危険性である。その鍵は「他者の全人性を尊重すること」にある。われわれがそのときその場で出会う他者から受け取る情報は常に部分的なものにとどまる。それらの情報から他者の全体を推測することはできない。では情報収集をできるだけ完璧すればよいのだろうか。否。情報はどれほど集めてもそれは他者「像」以上のものにはなりえない。それは他者にとっての自己「像」として、他者にとっても共有されるものであるが、それは他者自身(自己自身)ではない。そこには「場」が開かれていない。「場」はその他者が、そしてケアする自己が、おのずから変容し生成する場所である。ケアするものの「専心」ないしは「無私性」とは、その場の開けを促し、かつ守るということの意味するのである。

3. 結論

メイヤロフの所論は、直ちに実践の場に応用できる具体的な指示を含んではいない。感情労働を避けられない現場の感覚からすると、そこそ別世界の戯れ言のように聞こえるかも知れない。しかし、その際にともすると見過ごされがちな視点は、専門職として援助を行っている人が、なぜケアを旨とする仕事に携わっているのかと言うことである。それに対して、人の役

に立ちたいからという回答は建て前と本音の両方を含んでいることであろう。しかし同時に仕事だから、技術を習得して自立して生きていけるから、といった理由も挙げられることであろう。その中で忘れられがちなことは「他者との出会い」ということである。これはその人が援助を必要としていればいるほど重荷である。しかしこの重荷はハイデッガーのいう情態性に由来するのであり、世人というあり方の根底にあるものがあらわになったということに過ぎない。他者との出会い、いいかえればケアの現場は重荷を担うものの出会いの場であり、情態性の共有なのである。しかしそこにおいてはじめて actuality は展開する。すなわち他者をケアすることが自己自身をケアすることに通じ、自己をケアすることが他者をケアすることに通じる。それは他者に専心することによって自分が無化され、そのことを通じて自己が actuality を広げるということである。それは、自分の中にわき起こる感情を味わいつつもそれが治まり、自己を含めての他者そのもの、ことがらそのものへと住み(澄み)わたっていく方向を見据えることに他ならない。そのとき、援助することを結果ないしは成果のみから判断するという態度もまた乗り越えられていくはずである。ケアにおいてはケアの初心に立ち戻ることが大切である。それは相手と自分の双方における通奏低音である「気づかい」としての pathos=情念に耳傾けることなのではないだろうか。

注

- 1) 加藤直克「ケアとは何か」『ケアの生命倫理』日本評論社2004 p.105-126
- 2) Louise de Raeve: Caring Intensively, in David Greaves & Hugf Upton (eds.), Philosophical Problems in Health Care, Avebury, 1996, pp.9-22.
- 3) 「インド思想史における公と私」奈良毅, 『公共哲学1 公と私の思想史』東京大学出版会 2001 p.251-265
- 4) 中畑正志「〈感情〉の理論, 理論としての〈感情〉」『思想』9482003 p.5-36
- 5) M. Heidegger: Gesamtausgabe Bd.2 Sein und Zeit 1977 S.178ff.ハイデッガー『有と

- 時』辻村公一他訳 創文社1997p.206ff
- 6) 感情の理論については、ランドルフ・R・コーネリアス『感情の科学』齊藤勇他訳誠信書房1999, ロス・バック『感情の社会生理心理学』畑山俊輝他訳金子書房 2002, ヘルマン・シュミッツ『身体と感情の現象学』小川侃編 産業図書 1987などを参照。
- 7) ハイデッガーは『存在と時間』の中ではパトスと情態性とを同じであると明確には述べていない。しかしアリストテレスの『弁論術』を取り上げる際に *pathe* (*pathos* の同義語) に言及し、これを話者がそこへと入り込みつつまたそこから発話している気分ととらえ、そこにおいて現存在が他者と共に存在しているという根本的な開けが示されていると解釈している (cf. *ibid.* S.138)。ハイデッガーの情態性という概念の基本をなしているのは、このアリストテレス『弁論術』でのパトスについての考察であるとする見解については、次の論文参照。佐々木正寿「ハイデッガーのパトス解釈と情態論」『メタフシカ』第29号1998p.87-95
- 8) 石川准「感情管理社会の感情言説——作為的でも自然でもないもの」、『思想』907, 2000p.41-61
- 9) ホックシールド『管理される心—感情が商品となる時』石川准・室伏亜希訳, 世界思想社, 2000
- 10) 「援助」については特に次の論文を参照。稲沢公一『援助者は「友人」たり得るか—援助関係の非対称性』(『援助するということ』有斐閣 2002p.135-208)
- 11) Milton Mayeroff: *On Caring*, Harper&Row 1971, メイヤロフ『ケアの本質』田村真他訳 ゆみる出版1998 引用文の数字は邦訳のページ。
- 12) Carol Gilligan: *In a Different Voice*, Harvard University Press 1982
- 13) Nel Noddings: *Caring* University of California Press 1984, ネル・ノディングス『ケアリング』立山善康他訳, 晃洋書房 1997
- 14) *reality* と *actuality* とを対比的に論じたものとしては、木村敏「リアリティとアクチュアリティ」(『講座生命'97vol.2』河合文化研究所2001 p.75-110, のちに『分裂病の詩と真実』河合文化研究所1998 p.127-164に再録), 斎藤慶典「「アクチュアリティ」の／と場所」(『講座生命 2001vol.5』河合文化研究所2001p.59-90) があり、特に斎藤論文からは大きな示唆を受けた。

Care and Pathos

Naokatsu Kato*

Summary

For almost 20 years the word 'care' has found a great variety of uses in various fields, including medicine, nursing, counseling, education, religion, cosmetics etc. We can now easily find a new employment of 'care' in our everyday life. This wide range of the use of 'care' might be ascribed to the fact that it could meet the essential and various demands of modern life and human relations. But as the diversity of its employment grows, the meaning of 'care' is becoming inevitably ambiguous. This ambiguity may have both a negative and positive sense. On the one hand it is because 'care' might have essentially no original core meaning. On the other hand it may have a profound and symbolic core meaning which couldn't easily be understood, but would reflect the way of human life in the postmodern world. So it seems to be at least necessary to try to find its core meaning, if possible. The most popular meaning of 'care' is the act of helping or service (caring). But we can't say that every kind of help deserves to be called 'care'. In this article the author tries to show that 'care' contains 'pathos' as the core ingredient. The Greek word 'pathos' has almost the same meaning as 'emotion'. And the problem of emotion like 'emotional labor' or 'emotional control' in the act of care (caring) has recently been widely discussed in the field of care work. But 'pathos' seems to have a more profound and wider implication than 'emotion'. 'Emotion' is surely one of the most important ingredients of 'care'. But it may not be an inevitable one. On the contrary, 'pathos' may underlie every act of care. Thus we can understand why 'care' is used so much in the postmodern age, namely from the end of the 20th to the beginning of the 21st century, when 'nihilism' prevailed worldwide.

Key words: Care, Pathos, Emotion, Mayeroff, Reality and Actuality

* Department of German & Philosophy Jichi Medical School